九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

トランスナショナリズム／トランスカルチュラリズムの研究 ： グローバル人類学試論

江淵, 一公
九州大学

https://doi.org/10.15017/2320120

出版情報：九州人類学会報. 25, pp.1-16, 1998-03-31. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

トランスナショナリズム／トランスカルチュラリズムの研究
―グローバル人類学試論―

九州大学　　江　淵　一　公

Ⅰ．はじめに

1．九人研のこと

九州人類学研究会（以下、九人研と略称）が発足したのは1972年のことだから、すでに四半世紀が経過したことになる。九人研ができるまでには、1950～60年代に、九大内部の人類学に関心を持つ教官学生による「クアス」（KUAS：Kyushu University Anthropological Society）や「ESA会」（ESA：Education, Sociology and Anthropology）などの先行研究会があったが、あまり長続きしなかった。それからみれば、九人研は息の長い研究会である。「継続は力なり」という言葉があるが、九人研の持続力は誇っていいものだと思う。日本民族学会の地方部会の中では老舗の中にはいる。この九人研の総会で話をさせて頂くのは今回が２回目になるが、前回は、福岡教育大学から広島大学へ転任することがきまってからのことだったのでお別れ会のような形になった。今回もまた、後１年足らずで九州大学を定年退官する年度に当たり、（1997年）４月には福岡を離れることになっているので、やはり一つの節目に当たる。前回は、それまで力を入れてきた文化変容論とエスニシティ研究との関係について話をさせていただいたが、今回は、私のこれまでの研究全体を位置づけるための枠組み探しのような話になるかと思う。

2．研究を振り返って

私がこれまで行ってきた研究は、一口で言えば、人間の文化的動態に関する文化人類学的研究とでも呼べるものかと思う。人間動態研究の主な対象は、移民（immigrants）、在留民（sojourners）、難民（refugees）・亡命者（displaced persons）、旅行者（tourists）などである。それらは、いわば「異文化へ旅する人々」であるが、それらの人々が異文化と接触したときどのようなことが起こるのかという問題に私は関心を寄せてきた。前の総会講演の時は、文化変容研究とエスニシティ研究とは、裏表の関係にあることを論じたのであるが、それは同じ対象も、元の文化（母文化）の変化の面に焦点を合わせるのか、それとも持続や復興の面に関心を持つかによって文化変容研究（異文化との接触により母文化はどのように変化するか？）とエスニシティ研究（母語・母文化はどのように持続し、利用され、再編・創造されるか？）に分かれるとも言えるからである。一方、私は、現代の「国際化」に関連する諸問題の研究にも関心を持ち、海外・帰国子女や留学生の文化的適応の諸問題を具体的題材に取り上げながら、最近の文化人類学でも関心を喚んでいるトランスナショナリズム（transnationalism）、グローバリゼーション（globalization）の問題と関連づける研究を進めてきた。国際化（internationali-zation）とは、モノ・資本・情報・ヒトの国境を越えての双方向的移動で、それが進むことによって、異なる国家間で、付加価値を持つものの相互浸透、システムの互換性・共同

化の発達、規範・運用ルールの共同化の発達などがみられるようになる過程であるが［江淵1990］、それらの発展は国民国家の枠組みがベースになっている。これに対して、最近のヒトや情報や文化の動きは国民国家の枠組みを超えたものが多い。すなわち、個人や企業、民間組織などがベースになって、ヒト、モノ、情報、資本等が国境を越えて流れ、人々のライフスタイルや生活の構造に大きな影響を与えている。そうした過程が「トランスナショナリズム」と呼ばれている現象であり、その集積的結果として、いわゆる「グローバリゼーション」が進む。グローバリゼーションとは、情報、イメージ、製品の地球的規模の伝達の大量化と高速化、地球的規模の人口移動の激化によって、政治的、経済的、文化的共同化が進む過程である。別の言い方をすれば、輸送・通信・メディア等、ヒト、モノ、情報の伝達技術の高度化と多様化によって地球上の時間・空間が現実的にも想像的にも圧縮されていき、人々の時間・空間認識が「共同化・共有化」の方向に変わっていく過程である。ハーヴェイの言葉を借りれば、「時間・空間の圧縮」（time-space compression）［Harvey 1989］こそはポストモダンの時代的特質であると言えよう。

グローバリゼーションの行き着く先はいったいどのような状態なのか。グローバリゼーションの終末段階の政治的、社会的、文化的状態を予測することは難しいが、その過程で起こる社会的文化的過程を把握する研究は可能である。私の現在の関心は、トランスナショナリズム・グローバリゼーションの視野の中で文化の変化を究明すること、別言すれば「ポストモダニティの人類学」［Harvey 1989; Appadurai 1990］ないしは「グローバル人類学」（global anthropology）の視角から自分のこれまでの研究を振り返り、これからの課題について考えてみることである。以下、その一端を述べてみたいと思う。

II．ポストモダニティと文化的動態の人類学

わたしはこれまで、1国1文化だけに終わらない人間の一生というものに関心を寄せてきた。ポーランド系アメリカ人や日系アメリカ人、ウクライナ系カナダ人などの移民のエスニシティの問題や、日本企業の海外進出に伴って増えてきた日本人海外渡航者の文化的適応、アイデンティティの問題についての調査研究がそうである。とりわけ私が関心を持ったのは、移民や移住者たちが母国から持ち込んだ文化と渡航先の支配的文化との二つの文化の関係、そしてそのような境遇のもとで成長する子どもたちの文化化の構造と過程を明らかにすることであった。

ここでかいつまんで私の調査歴に触れておきたい。私のフィールドワークは、タオス・プエブロ・インディアンの文化変容研究（1962-63）から始まり、ペンシルベニア州マキースポート市の黒人（1971-72）、コネチカット州ニューブリテン市のポーランド系アメリカ人（1976）、カリフォルニア州サンノゼ市の日系アメリカ人（1979、1984）、アルバータ州エドモントン市のウクライナ系カナダ人（1984）等の調査を通じて、いわゆる「ニュー・エスニシティ」の諸問題に関心を持ち、エスニシティの創造過程（黒人）、エスニシティの政治的動員過程（ポーランド系アメリカ人）、エスニック・アイデンティティの変容過程（日系アメリカ人）、エスニシティの制度化過程（ウクライナ系カナダ人）等の諸問題を追究してきた。とくに、研究の重点を、いずれのエスニック・グループにもほぼ共通に見られる現象としての「支配的文化への同化（文化変容）機構」「母文化維持機構」「バイカルチュラ

リズム（二文化併存機構）」の３点の解明におく形で調査研究を進めた（それらの研究の成果の一部は、拙著1994にまとめた）。そうした中で私は、ヒトの国際化、すなわち、人々の国境を越えての移動が大衆化する現代的人間移動の文脈における文化変化・エスニシティ変容の研究は、文化Ａと文化Ｂの接触、つまり異文化接触と文化変容という視点や、移動人間群の送出国対受入国という視点（これはしばしば途上国対先進国という二分法的構図で捉えられることが多い）からだけでは不十分であり、視野をよりひろく世界に広げて、いわば地球的文脈の中で捉える研究の枠組み（単なる二分法的構図を超える枠組み）が必要であることを痛感するようになった。このような認識は、とくに日本人の海外渡航の増加、とりわけ「異文化に育つ子どもたち」の急増に伴う諸問題を彼らの渡航先に出かけたり、帰国後の行動を追跡してみたり、また日本の学校に学ぶ外国人留学生や外国人児童生徒の諸問題の研究を試みるなかでさらに強化されていったように思う。

そうした問題について考える過程で、私が次第に惹かれていったのは、近年のアメリカ人類学において新しい研究分野として関心が高まっている、ポストモダニティの視点からの文化動態の研究である。それは、トランスナショナリズム、トランスカルチュラリズム、グローバリゼーションの視点からの文化変化の研究である。

Ⅲ．トランスナショナリズム・トランスカルチュラリズム・グローバリゼーションの人類学

１．「国際化」の意味ー日英語比較ー

上に述べた「トランスナショナリズム、トランスカルチュラリズム、グローバリゼーションの視点」というのを簡単に説明することは難しいし、私自身まだ十分に概念の整理がついているとは言えないので、ここでは、新しい枠組みを模索する過程での「覚え書き」といった程度の意味で述べることをお赦し頂きたい。

ここでまず、日本語の国際化の意味について若干触れておく必要がある。わが国では、「国際化」という用語がかなり広い意味で用いられているため、上に列挙したような諸概念は、ほとんどその中に含まれてしまっていると言ってもよいほどである。しかし、そのことは半面では、日本語の国際化はつかみ所がないほど多義的で曖昧な用語であることを意味する。「国際化」という用語の多義性・曖昧性については、すでにハルミ・ベフ（別府治海）氏をがある程度体系的に指摘している。ベフ氏は、関西学院大学との共同研究の成果としてこの問題についての詳しい論考を発表しているが、それによると、日本語の国際化は、西洋文化の摂取、外国人の受け入れ、外資の導入、貿易政策の自由化、日本の海外投資の増加、外国語能力の向上、外国人との交際、異文化理解の促進、帰化、日本語教育の普及、日本文化理解の促進、世界秩序への貢献、彼我の差異の鮮鋭化、文化的自律性の主張、国益の追求、といった多様な内容を含む漠然とした概念である［Befu, 1983］。

ベフ氏は、これらの内容を分析して、要するに、日本人のいう「国際化」は国益中心主義に基礎づけられたもので、それはめぐりめぐって、結局は「国粋化」へ収斂する構造をなしているという捉え方をしている。氏によれば、日本語の「国際化」に対応する英語の“internationalization”は一義的に明確な用語で、日本語のような曖昧な使い方はなされていないという。しかし、ここで注意すべきことは、氏のいう「一義的に明確な」その英語は、元来とんでもない意味を持っていたことである。

私は別の機会に英語の国際化の発祥を『オックスフォード英語大辞典』（O.E.D.）により調べたことがあるが、それによると、英語の“internationalization”はかなり新しい語で、最初にこの語を英語辞典に採録した（1864年）『ウエブスター辞典』によれば、「国際化」とは、「関係、効果、あるいは範囲を国際的なものにすること、特に国際的管理もしくは保護のもとにおくこと」を意味した。基本的にこの定義に準拠したと思われるO.E.D.（1961年版）では、「性格もしくは使用を国際的にすること、特に近代政治学で、（国もしくは領土などを）複数の国の共同統治もしくは共同保護のもとにおくこと」という定義が与えられている。O.E.D.に載っている古い用例（1885）に「スエズ運河は国際化されなければならない」（“The Suez Canal must be internationalised”）というのがあるが、これはスエズ運河を列強による国際的共同管理下におくことを意味した。この意味では、連合軍の占領統治下にあった終戦直後の日本もまさに「国際化された」状態にあったということになってしまう。

ベフ氏の論議は多分1970年代の国際化論議をベースとしたもので、その時期には欧米ではこの語はほとんど死語に等しかった。私が調べた限りでは、欧米でこの語が日本と同様多用されるようになったのは1980年代末から1990年代初頭にかけてのことであり、きわめて新しいことに属する。そして、近年の用法では、先述の用法とは違って、国家間の相互交流と相互調整の意味で使われている。それはある意味では、日本語の用法に近づいていると言えなくもないのである。この問題の論議については別の機会に詳論したことがあるので［江淵1990, 1997a］、その論議はこの際措くとして、確かに、日本語の国際化が多義的であることは認めざるを得ない面もある。そこには、internationalism / internationalization、transnationalism / transnatioanlization、transculturalism / transculturalization、globalism / globalizationなど、相互に関連を持つ諸概念がすべて包括されていると言えるような用例が少なくないからである。これに対して近年の欧米における「国際化」の用例をみると、主として「国家・政府」間で展開しているフォーマルな相互関係・相互作用に言及する場合に限定してこの語を用いていることが多いように思う。国民国家の存在を前提として論じられている印象が強い国際化という用語を限定的に用いる用法の増加は、現代のヒトやモノや情報や文化の流れには、国家の枠組みを超えようとするものが増えている事実を正確に捉える必要があるとの認識が次第に一般化してきていることを示唆する。

そうしたやや限定的な用法による国際化は、日本語の国際化に比べれば狭義の国際化ということになろう。その意味の国際化は敢えて定義を与えるならば、およそ次のようにいうことができよう。「国際化」とは、主に国・政府ベースで展開する国家の枠組みの中でのヒト・モノ・情報・資本等の交流・流動化のフォーマルな関係・過程である。この過程を通じて、世界諸国間に、付加価値を持つ情報や技術等の相互交換に関する組織・運営規則・規範・理念が共有されるようになり、制度の互換化（例えば、外国の大学で取得した単位が自国の大学の単位として認められる交換留学制度などはその典型的な例である）が進み、国際合意（例えば、国際人権規約とか子どもの権利、障害者の権利、女子差別撤廃等に関する条約や宣言の批准など）が徐々に形成されていく。こうした過程を経て国際秩序が構築されていくのであろう。

しかし、現実の動きははそう単純ではない。政府・国家間の交流協定・合意形成といったフォーマルな過程に対して、民間企業や非政府組織による国家の枠組みを超えたインフォーマルな交流が年々盛んになり、問題分野によっては、一般庶民の生活にとってそれらの活動の方がはるかに重大な意義

や影響を持つ事態が増えているからである。それが次に述べるトランスナショナリズム、トランスナショナリゼーションの問題である。

2．トランスナショナリズムの人類学

トランスナショナリズムという用語がいつ頃から普及し始めたのかは定かではないが、これについて言及した論文は人類学の分野でも最近急速に増えている［Basch 1994; Crick 1989; Glick, Basch and Blanc-Szanton 1992; Foster 1991; Gonzales 1992; Inda 1996; Kearney 1986, 1989, 1995a, 1995b, 1996; Lamphere 1987; Lamphere（ed.）1992; Lamphere, Stepick and Grenier（eds.）1994］。この語をどう邦訳するかは難しい問題である。敢えて言えば、「民際化」ということになるが、日本語の「ボーダーレス化」とか「多国籍化」と呼ばれている現象や過程がこの語の意味に近いと言ってよかろう。欧米の文献では“transnationalism”の用語を最も多くみかけるが、“transnationalization”という語も散見する［例えばKearney 1996: 115］。

これらの文献によれば、トランスナショナリズムまたはトランスナショナリゼーションとは、主に民間・非政府組織（NGO）ベースで国境を超えて展開するヒト・モノ・情報・金融・資本等のインフォーマルな交流・流動化の関係・過程を意味する。ここでも国家の枠組みの拘束は持続するが、越境の日常化が進むことによって、国境が事実上消失していく現象がトランスナショナリズムである。国の政策との直接の関わりは必ずしもなしに展開している先進諸国の企業の海外進出、多国籍企業の増加、有利な職を求めて、ありとあらゆる手段を使って国境を越える労働移民・外国人労働者の増加等、トランスナショナリズム現象の例は枚挙に遑がない。グローバルな規模で進むトランスナショナルな文化の流動過程を「風景」（landscape）という用語を用いて整理した、有名なアパデュレイの「グローバルな文化の流動化の『風景』」論は、次のような５つの「風景」を示唆している［Appadurai, 1990］。

①民族風景（ethnoscapes）：国境を越える人間の大量移動、すなわち、海外旅行者、移民、難民、亡命者、外国人労働者などの流動化現象。

②技術風景（technoscapes）：多国籍企業がもたらす技術情報の流動化の状況。

③金融風景（finanscapes）：通貨市場・株式相場への多国籍資本の流入。これにより金融市場管理のボーダーレス化が進み、それが一方では、外国資本による不動産購入等にみられるように、金融・投資摩擦を生む源泉となっている。

④メディア風景（mediascapes）：新聞・雑誌、テレビ、映画等の各国語吹き替えによる外国情報へのイージーアクセスの状況。

⑤思想風景（ideoscapes）：自由、福祉、権利、民主主義、国家主権等の思想の普及、異なる生活の価値観の流入が、より多様な新しい生活スタイルへの可能性を拓いている状況。

この整理枠に照らして言うならば、これまで私が最も関心を寄せてきたのは、ヒトの移動が織りなす①の「民族風景」と、そしてそれに付随して生起する新しい人間の生き方・人間像に関わる⑤の「思想風景」の諸問題に関する研究であったということになるかと思う。ヨーロッパ、アジア諸国か

らの北米（アメリカ、カナダ）への移民の文化的適応とアイデンティティについての研究、日本の海外在留邦人・帰国者の文化的適応の研究、外国人留学生や外国人労働者などの新しい在日外国人（ニューカマー）の文化と教育についての研究など、いずれも①と⑤に関わる研究であった［江淵1994a, 1997b］。アパデュレイは、各国におけるこれらの５つの「流れの風景」にはズレがあり、例えば日本は、モノや情報の流入には寛容であるが、ヒトの流入には硬く閉鎖的であると指摘しているが［Appadurai 1990: 301-302］、これは正鵠を射た指摘だと思う。

ヒトの流れの風景の中でも、これからのポストモダニティの人類学にとっての最も重要な研究課題は、国境を越えて移動する人間群がつくり出すディアスポラ・コミュニティ及びそのライフスタイルの特色の究明を、彼らのコミュニケーション・ネットワークの広がりの視点から行い、それらが母国・出身国と移住国・渡航先国との間の政治的経済的関係構造に対して、また他の諸国との関係に対してどのような影響を及ぼしつつあるかを明らかにすることであろう。かつては移民（immigrants）と言えば、渡航先国に定住してその国の人間になり切る人々のイメージが強かったが、今日では必ずしもそうではなく、むしろ両国いずれにも根を下ろす場所を持ち、いずれとも政治的経済的に固い絆を保つ形で暮らしている人々が増えていると言われる［Basch et al., 1994］。一見、伝統的な親族組織、近隣集団の結合原理を保ちつつ昔ながらの暮らしをしているように見える（とくに途上国の）人々の生活が、実は、遠く外国へ出稼ぎに行った家族や親族からの仕送りに支えられて成り立っているという事実は、すでに経済基盤そのものがトランスナショナル化していることを物語る。メキシコ農民の生活構造をトランスナショナリズムの視点から分析し、農民生活における「国境の喪失」状況を精細に捉えたカーニーの研究は重要である［Kearney 1996］。

そうした視点から見るならば、国家はあっても「国境」はないに等しい（“Nations Unbound”, by Basch et al. 1994）と言えよう。もともと労働移民（migrant workers）というのは、基本的には、余剰労働力をもてあます第三世界の経済と、低賃金労働力を必要とする第一世界の経済との格差がつくり出す構造的な現象であると考えられる。ただ、今日の労働移民は、いまや、その移動が多方向的に流動化し、不法移民を含めて「越境の日常化」が進んでいる。すべての人間が国境を越えて動き回っているわけではないが、安定した保守的コミュニティと見えるところもいまや経済的、政治的に外の社会との複雑な関係の網の目の中に組み込まれてその安定性を保っている点に注意する必要があるのである。しかも現代の人々は、国内の都会へ出稼ぎに行くのとそれほど違わない気軽さで外国の都会へ出稼ぎに行くと言われる［Appadurai 1990: 297］。

国境を越えて流れ込む大量の外国人は各地にいわゆるディアスポラ現象をつくり出している。ディアスポラ現象とは、ユダヤ人の場合に典型的にみられるように、言語・文化（とくに信仰）を共有し、独自性に関する神話と祖国への関心を持ち続けている人々が、そのエスニシティを持続させるための空間と組織を移住先に発展させ、母国／祖国や他のディアスポラ・コミュニティとの間にネットワークを構築することをいう。難民や亡命者は、ディアスポラ・コミュニティの第一世代を形成する。今日、世界人口の中で難民・亡命者・国籍喪失者の占める割合が増加しているが、これらの人口の増加は、カーニーも指摘するように、「国民」とは何かをめぐる、いわゆる“Identity politics”の問題を惹き起し、「市民（国民）」や「定住外国人」のような概念を問題化させる可能性を潜在させている［Kearney 1995a］。

ディアスポラ・コミュニティが先住者コミュニティとの間にどのような関係をつくり出すかは、その民族の歴史と与えられた環境条件によって異なるが、民族構成という視点から見ればそれはその社会／国の「民族的・文化的異質化」を促進する要因となる。しかしながら、流入者が完全な意味の自律性を持つコミュニティ（治外法権的空間）をつくり出すことは多くの場合難しく、現地の支配的文化に対する大なり小なり何らかの程度の同化は避けられない。とくに第2世代は全体社会の情報環境の影響を受けて育つ。そこにはいわゆる「異文化間教育」の過程が展開する［江淵1994］。異文化間教育とは図式的に言えば二つの文化の狭間で展開する人間形成の文化的過程である。この過程はしばしば、いずれの文化にも安定した帰属感を持ち得ない「マージナリズム」（marginalism）を生み出すことがあるが、いくつかの試行錯誤的調整の段階・過程を経て、二つの文化が何らかの形で個人の内面に統合的に併存する「バイカルチュラリズム」（biculturalism）を形成することも知られている［江淵1994：73-126］。ディアスポラ・コミュニティの生活構造とは何からの意味でバイカルチュラリズムの構造を持つ。

3．トランスカルチュラリズムの人類学

トランスナショナリズムがつくり出す、国境を越えての人間の移動は、上に述べた意味では文化の境界を超える移動でもある。その側面に着目する文化変化の研究がここでいう「トランスカルチュラリズム」（transculturalism; transculturalization）の研究である。バイカルチュラリズムの研究もトランスカルチュラリズム研究の一部と考えてよかろう（なお、“internationalism / internationalization”を「国際化」、“transnationalism / transnationalization”を「民際化」と訳すならば、“transculturalism / transculturalization”はさしずめ「文際化」ということになるが、国際化を除き馴染みにくい日本語かと思われるので、ここではカタカナ書きで通すことにする）。

トランスカルチュラリズムは、最も広義には、トランスナショナリズムの進行の結果生じる生活様式の変化過程全体を指す。それは、異なる文化の流入による文化の多様化と付加価値化全般を含めて考えることができる。バイカルチュラリズム（二文化併存）やマルチカルチュラリズム（多文化併存）（multiculturalism）もトランスカルチュラリズムの問題に関係の深い現象である。外面的にわかりやすい例を挙げれば、日本人の生活ではすっかり定着した和洋折衷の建築様式や和洋両用の服装、食生活などはすべて広義のトランスカルチュラリズムである。しかしながら、厳密な意味では、二つ（以上）の文化が接触することによってそのいずれの要素をも含みつつ、しかもそのいずれでもない、いわば第三の文化の出現の可能性に言及するとき、このトランスカルチュラリズムという語の持つ語感に最もよく当てはまるように思う。つまり、既存の文化を「超える」（trans-）文化が出現する状態が狭義のトランスカルチュラリズムである。相異なる二つの文化の接触結果を表す語としては、「文化的混血」（cultural hybridism）をはじめ、文化的融合（cultural amalgamation）、文化的統合（cultural integration）など類縁語がいろいろあるが、文化人類学における最も代表的な語は「習合」（syncretism）であろう。これはとくに土着の信仰と外来の宗教（キリスト教）との融合から生まれた独自の信仰形態に対して当てられた語であるが、この習合現象もここでいうトランスカルチュラリズムの一形態とみることができる。

トランスカルチュラリズムは、文化のさまざまな面で生じる。先述したような日本人になじみ深い

和洋両用の生活スタイルにおける「洋式」なるものも、細かくみれば微妙に西洋のオリジナルとは異なる、日本風の味付けや修正が加えられた「日本版西洋」であることが多い。そうした変化もトランスカルチュラリズムである。しかし、これまで私が関心を寄せてきたのは、異文化接触に伴う人間の内面的環境におけるトランスカルチュラリズムの問題であった。私は、幼少期を異文化の中で過ごしたわが国の青少年帰国者たちの日本社会（学校）への復帰適応の過程や彼らのアイデンティティの変化の問題をライフヒストリーの分析を中心に様々な機会に調べたが、その過程で非常に興味を持ったものの一つに「メタカルチャーの会」という名の帰国青年有志の組織がある。この団体のことについては別の機会に書いたことがあるので詳細はそれに譲るが［江淵1994：479-518］、私が関心を持ったのはこの団体の名称の含意についてである。この「メタカルチャー」（meta-culture）というのは、外国で育った彼らがほぼ共通に感じている日本文化に対する微妙な違和感や日本社会での「居心地」の悪さ、自分の「居場所探し」の悩みを理解し合い分かち合うことのできるある種の心理的空間を意味している。それは外面からは把握困難な内面の世界であることから「メタ」と呼んだものと思われるが、それは同時に、日本や外国の既存の文化をより広い視野で客観的に捉えることのできる視点を持っていることをも意味する。この「メタカルチャー」は、いまやこの分野の研究の“古典的”文献となったアメリカの人類学者ユーシームの「第三文化」（The Third Culture）論を想起させる［Useem 1963］。

相異なる二つの文化と恒常的に接触する構造的条件の下で暮らし、育つ人間が身につける二つの文化の関係機構（メカニズム）は実際には個人差が大きいため一般化して述べることが大変難しいが、異文化接触・文化変容研究の分野で提起されてきた諸概念や諸理論、例えば、ストーンクイストの「境界人」理論［Stonequist 1937］をはじめとして、ポルガーの「バイカルチュレーション」理論［Polgar 1960］、マッフィーの「150%人」論［McFee 1968］、リーブラ、コンクライト、アドラー、グチェレスらの「二文化人」理論［Lebra 1972; Conkright 1975; Adler 1975, 1985; Gutierrez 1985］などは、バイカルチュラリズムの心理的機構を解明するための有用な示唆を含んだ研究である。1960～70年代までの研究は伝統的な「文化変容」の視角からの研究が支配的であったが、1980年代から1990年代にかけての諸研究は次第に、国際化、トランスナショナリズム、グローバリゼーションの視野で捉えようとする動きが顕著になってきた。アドラーの論文［Adler 1985］はその先駆であったと言えよう。

こうした研究を進めるに際して注意を要する問題に一言触れておきたい。それは、こうした文化的適応の問題を扱う場合、彼らの母文化と現地の支配的文化とは対等ではないことにまず留意してかかる必要があることである。両者の間には政治的権力関係の構造が隠れているからである。重要な問題として、労働力としてのヒトのトランスナショナルな流動化の波に乗って渡航する外国人労働者は、他国では３Ｋ職場で働く低賃金の最下層階級を形成する傾向がある。そのため、彼らの母文化そのものがそうした経済的政治的関係構造の枠組みの中で一段劣ったものとして低く評価される危険性をはらんでいる。

４．グローバリゼーションの人類学

これまで述べてきた国際化・トランスナショナリズム・トランスカルチュラリズムの諸現象は、す

べてグローバリズム・グローバリゼーション（世界化・地球化）と関わる現象である。グローバリゼーションについて論じたものは近年、人類学分野でもかなり増えている［Appadurai and Breckenridge 1988; Foster 1991; Kearney 1984, 1995a］。中でもトランスナショナリズムの人類学（transnational Anthropology）を標榜するアパデュレイやカーニーの説が注目される。アパデュレイが、現代のトランスナショナルな、あるいはグローバルな規模でヒトや情報や文化が絶え間なく流れる様を「風景」（-scapes）という言葉を使って捉えようとしたことはすでに述べた。グローバリゼーションは、電子通信技術を中心としたグローバル・テクノロジーの発展に支えられて展開しているが、それがこれまでの人類の生活パターンに及ぼす影響は計り知れない。それをどう捉えるかはこれからの人類学の課題である。

グローバリゼーションは、しばしば「コカコロニー化」（Coca-Colonization）とか「マグドナルド化」（McDonaldization）とか、いささか揶揄と皮肉を込めた言葉で語られることがある。揶揄と皮肉は、しばしば「文化帝国主義」の代表と目されるアメリカで元々起こった文化であるためでもあるが、他方では、これらの言葉は、ファーストフード供給システムの持つ合理性や簡便性や効率といった、科学技術時代の人間がほぼ共通に評価するある種の普遍的価値を持つ通俗文化（popular culture）として、世界各地に受け入れられている現実を認めざるを得ないことも含意していると思われる。マス・メディアを介して伝えられる、ファーストフードやTシャツやジーパンやロック音楽などの世界的普及が物語るように、グローバリゼーションは、少なくとも外面的行動における文化の共通化・一元化を促進する。もっとも、このようなグローバリゼーションも子細にみれば、その文化が受け入れられた地域の土着的文化によって独自の味付けが行われるもので、元の文化と全く同じとは言えない場合が多い。構造やシステムは同じでも、その内容や運用の仕方は微妙に異なることが少なくないのである。例えば、ファーストフードのマクドナルド・ハンバーガーは世界の名だたる都市にあまねく普及しているが、魚をよく食べる日本では個性的なフィッシュバーガーが生まれ、ジャガイモをよく食べるドイツでは独特のポテトバーガーが生み出されている。こうした現象は「グローバリゼーションの地域化」（localized globalization）とでも呼ぶべきものである。この意味では、グローバリゼーションとは文化的内容の均質化ではなく、文化を維持するシステムや構造の共通化を意味するのかもしれない。

そうした“都会的”通俗文化の伝播による文化的同質化・共通化は、それらを日常的生活スタイルとして身につけた人間のトランスナショナルな移動によってさらに強化されていく。しかしながら、同時に他方では、そうした外面的類似性の下に隠された異なる価値観や信仰、世界観が、異なる言語と共に、トランスナショナルなヒトの流出入によって発祥地を遠く離れた異なる地域へ持ち込まれ、それらの人々がコミュニティを形成するとき、その地域には、異なる文化集団が出現し、その社会の文化的異質化を増大させる。そうした文化的多元化の進行は、それまで支配的文化の圧力のもとで抑圧的状態におかれていた国内の既存の少数民族の文化的活性化を助長する刺激的要因となる可能性もある。トランスナショナリズムとグローバリゼーションとは手を携えて進み、地球の文化的同質化と異質化の両方に貢献しているということであろうか。

トランスナショナリズムとグローバリゼーションとは重なる部分が多いが、国民国家をベースとした過程である前者に対し、特定の国民国家のテリトリーの拘束から離れて展開する後者の方がはるか

に広域的な過程である。しかし、外国への移住、交易網の発展、国際コミュニケーション技術の進歩、金融資本の自由流通などのトランスナショナリズムの過程が、グローバリゼーションの過程を促進する媒介要因となることが少なくない。トランスナショナリズムが進むと、遠く離れた世界各地のコミュニティを地球規模で結ぶ社会的経済的関係のネットワークが発展するからである。クリックも指摘するように、国際観光ツーリズムの隆盛も、トランスナショナリズムとグローバリゼーションの進行に一役買っていると言えよう［Crick 1989］。

国民国家は、一定の地理的空間である「テリトリー」（領土）をベースとして成り立ち、その領土（国土）を守備するための軍隊を持ち、その領土に生まれ「外国人」と区別される「国民」にその市民権を保障し、外国に対する外交政策の主体となる単位である。このようなテリトリー性に対して、それを超えた次元で展開するのがグローバリゼーションである。グローバリゼーションの過程は、巨大国際通信技術開発、グローバルなポピュラー音楽や大衆文化の普及、世界の環境問題等、必ずしも国民国家とは関係なしに生起する、より抽象的、非制度的、非意図的過程であるため、しばしば国家の法治権や権力をめぐって国民国家と葛藤を惹き起こす可能性を持っている。

ここで重要なことは、カーニーも指摘するように、グローバリゼーションの過程が、都市部と周縁部の境界を曖昧にし、現代の世界の空間及び時間に関する両極的イメージの再編を要求することである［Kearney 1994］。すなわち、グローバリゼーションは、これまでのような「都市部」metropolitan centers 対「周縁部」peripheral sites といった二分法的思考に基づく二次元的空間概念を陳腐化させる。世界諸地域の文化・情報は、グローバルテクノロジーとグローバルネットワークを介して、世界の隅々へ流れる。その結果、文化・情報の「中心」（発信地）と「周縁」（受信地）の境界が消失する傾向が生まれるのである。少なくとも先進諸国では、一部の極地を除けば、いまや学校とともに、テレビや電話を介して情報が流れ、かつて都会と農村の間にあった生活スタイルの差が著しく減少し、音楽や美術やファッションなど大衆文化が普及し、思想や教養や娯楽などの面での格差も縮小の一途をたどっている。むしろ、かつてはもっぱら都会文明の受け手とみなされていた「周縁」地域・地方の文化が「中心」へ逆流入するという現象もまれではなくなっている。先進国と途上国との間の文化的格差も徐々に縮小する傾向にある。かつてアルゼンチンの下層階級の音楽とみなされていたタンゴは、まずヨーロッパへ、そして日本へと伝播するうちに、いわば〈トランスナショナル空間〉で〈トランスカルチュラルな芸術〉に洗練されていき、それは電波に乗って世界各地に普及したのち、発祥国のアルゼンチンに環流したが、そのときは、アルゼンチンのナショナル・シンボル、すなわち、すべての階級の人々によって愛される「アルゼンチンが世界に誇る国民音楽」として受け入れられたという［Kearney 1995a］。「周縁」と「中心」との間のそうした相互交流とそれに伴う格差解消は文化のグローバリゼーションの一つの重要な側面であると言えよう。「周縁」からの文化的発信がみられるようになれば、都市部・周縁部という境界は曖昧になり、地球ははっきりした境界を持った二次元的空間から、境界のはっきりしない多次元的空間へと導かれていく。それがグローバリゼーションである。

こうした文化の地球規模の環流状況は、今日の人類学の課題を地域文化そのものの研究とともに、それらの相互関係の問題に焦点化した研究を要求している。

5．脱テリトリー化現象

ところで、これまで述べてきたトランスナショナリズム及びグローバリゼーションの本質的特色は、ハーヴェイのいわゆる「脱テリトリー化現象」(deterritorialization) である [Harvey, 1989; Basch, Schiller & Szanton-Blanc 1994]。脱テリトリー化現象とは、ヒトや組織や技術が発祥地（始まった元々の場所）を離れて別の場所で新たな展開を見せる現象をいう。それは「非境界化」の別名と言ってもよかろう。トランスナショナリズムもグローバリゼーションも脱テリトリー化現象の一種である。

ポストモダンの企業は、工場や職場を一定の地に固定せず、国内及び国外の適当な土地に移動させることによって、ハーヴェイの言葉を借りて言えば、「経済時間・経済空間の支配統制」を確保しようとする。そのため、原料、労働力、賃金水準、誘致条件、輸送、市場などについて、より有利な条件を求めて地方に工場を移したり（福岡県では、今年（1996年）、北九州市のサッポロビール工場の脱出をめぐって、各地で激しい誘致合戦が繰り広げられて話題になったことが記憶に新しい)、分散化したり、海外へ進出したりする。(主に第三世界の）人々もまた、より有利な収入を求めて世界各地（主に第一世界）へ出稼ぎや移民として分散化する。これらはすべて、脱テリトリー化現象である。

定住外国人の増加は、「国民国家の脱テリトリー化」を強化する条件になっていると言ってもよいであろう。なぜならそれは「国外に国民を持つ」ことであり、ある意味では国家のテリトリーの拡大分散化と言えなくもないからである。この傾向が続けば、国家のテリトリー内に住む国民と国外に住む国民（在外邦人）の関係はますます複雑化し、国家「主権」の影響範囲の問題（支援要求、救助活動など）も増えてこよう。トランスナショナルな労働移民は、受け入れ国からみれば「外国人労働者」に過ぎないが、送り出し国側からみれば、「外国で働く国民」であり、国民国家は、在留民、移民、難民のいずれを問わず、そうした国境外に住む「国民」に対して覇権を及ぼそうとするからである。アメリカへ移住した国民（の組織）との間にある種の政治的経済的関係を維持することに成功したハイチのアリスティド大統領は、「アメリカ合衆国在住ハイチ人コミュニティはハイチの第10番目の県である」と述べたという [Basch, et al. 1994]。そうした「脱テリトリー化した国民国家の建設」は、バーシュらによれば、ポストコロニアル時代のナショナリズムの新しい形態である。この意味の脱テリトリー化現象は、ユダヤ人のいわゆる、祖国の外に同胞がつくる民族国家という意味での「ディアスポラ」概念とは対照的とも言える。脱テリトリー化した民族国家の場合、同胞は世界中のどこにあっても祖国の外に住んでいるという意識を持ってはいないという (Basch, 1994: 269)。

アパデュレイと同様、グローバリゼーションの人類学を追究しているカーニーは、グローバリゼーションを、ある国家で発生するが、次第に国家の拘束を離れて、超国家的、地球的に共有される空間が拡大する過程と捉える。その視点から、グローバリゼーションとは、ある国民国家の内部で起こるが、ついには国家の枠組みを超え、国家の拘束を離れて展開する社会的、経済的、文化的、人口的空間の増加拡大過程であると定義する [Kearney 1995a]。この「空間の拡大過程」とは、言い換えれば「脱テリトリー化」である。アパデュレイのいう「風景」もそうした意味の空間の脱テリトリー化現象を違った言葉で表現したものと言える。例えば、民族空間（民族風景）は、合法移民や不法移民、難民などの増加によって脱テリトリー化が進んでいる。その「風景」は、例えば、「ニューヨークの

カリブ化」、「ラテンアメリカの首都ロサンジェルス」といった姿である。技術空間、財政空間（金融や資本）、メディア空間の脱テリトリー化現象もそれに劣らず顕著である。CNN、BBC、MTVなどグローバルメディアの展開は、ポップスやロック（音楽）、アニメーション、Tシャツ、ジーンズ、その他のファッションの普及など、言語を超えた空間でとりわけ顕著であり、それらの集積効果として、それらの発祥地から脱テリトリー化したグローバルな「大衆文化空間」を発達させている。

カーニーは、現在急速な勢いで脱テリトリー化が生起・拡大している「空間」として注目すべきものに、上に述べたような現代の文化的環流が起こっているグローバルスペースだけでなく、「ハイパースペース」（hypersspaces）と呼ばれる空間があることを指摘する。ハイパースペースとは、エアポート、機中、フランチャイズのレストランのように、国民国家が管理する発祥地（出発地や到着地）からほぼ独立したある種の公共的スペース（免税空間）として自律性を持つ環境である。さらに、電子メール、World Wide Webやインターネットによって可能となった、新しい「仮想現実空間」（virtual reality space）も一種のハイパースペースとしての意味を獲得しつつあると述べている［Kearney 1995a］。グローバリゼーションは、ヒトや情報のの大規模移動とともに、さまざまな意味の脱テリトリー化した空間の増加過程として展開しているのである。

Ⅳ．トランスナショナリズムの人類学の意味するもの

最後に、以上述べてきたようなトランスナショナリズムの人類学が示唆するインプリケーションについて若干述べて本稿の結びに替えたいと思う。

「未開」（非西洋社会）と「文明」（西洋社会）の二元論的世界観に根ざす近代人類学の関心の焦点は、意識的あるいは無意識的に進化論的視点をもって非西洋社会の伝統的文化の構造を把握することにあり、自律性、相対的自己完結性を持つ、いわゆる「リトルコミュニティ」を対象としつつ、バウンダリーの内部構造の静態的研究に焦点化した研究を進めてきた。（なお、ここでは、1900年以前の「科学としての文化人類学」の形成期、及びその確立期である1900～1945年の人類学を「近代人類学」（modern anthropology）と呼び、戦後の人類学を「近代主義的人類学」（modernist anthropology）と呼んでおく。そして、グローバル化時代の近代主義批判の上に立つ現代人類学を「ポストモダニティ人類学」（postmodernity anthropology）あるいは「グローバル人類学」（global anrhropology）と呼ぶ）。その後、西洋植民地主義のもとでそれらのコミュニティが大きな変化を余儀なくされる事態を迎えると、人類学の関心の焦点は、コミュニティの変化の研究、とくに異文化接触と文化変容に関心の重点がシフトしていったが、その変化に対するスタンスは、「近代化」の視角であった。近代化論的視角からの文化変化の研究は当然、「開発」と「進歩」の合理主義的哲学をアプリオリに受け入れたものであった。この近代主義的人類学（modernist anthropology）（1945～1980年代）においては、古典的人類学（カーニーによる。彼は、近代人類学の確立期である1900～1945年の時期の人類学を「古典的人類学」（classical anthropology）と名付けている［Kearney 1996: 23-40, 115-135］）において対比的に扱われた「未開社会」（primitive）対「文明社会」（civilized）という二分法に対して、「伝統的・低開発社会」（traditional/underdeveloped）対「先進社会」（developed）という二分法が主たるパラダイムとなった。そうした過程で、前者、すなわち「伝統的・低開発」社会の一部は「農民」

(peasant) 社会という新しい概念の採用によって「未開」と区別され、それが近代的「先進」社会(主として西洋諸国)をモデルとする近代化のターゲットとみなされるようになったと言うことができよう。

しかしながら、戦後、植民地主義が終焉を告げ、かつての「未開」「農民」社会が地球的規模の「近代化」に参加する過程で、南北問題と東西問題を2大基軸とする国際関係の構造的矛盾が大きく影響し、第一世界、第二世界、第三世界、そして第四世界の格差が拡大した。他方では、近代主義・開発主義が生み出した環境破壊、その他の人類の生存基盤を揺るがす大きな問題が明らかになってくるなかで、突如、冷戦構造の終結という事態を迎え、世界は大きく転換し始めた。南北問題や旧東側諸国の経済問題、歴史的民族問題など、世界経済・政治の矛盾構造は、基本的に戦後一貫して変わっていないが、ここ20年ほどの世界の動きの中ではっきりしていることは、あきらかに世界がグローバリゼーションの方向に向かって動いている事実である。それは、グローバル・テクノロジーの進歩に支えられて、ヒト・モノ・情報・文化のグローバルな流動化・環流が加速度的に増大し、さまざまな分野・レベルで、僻遠の極地を含め世界各地をくまなく繋ぐネットワークが発展していることである。世界の経済秩序が、ウォーラーステーンの主張するような「世界システム」に向かって動いていることを示唆する事実も徐々に増えていることは間違いない [Wallerstein 1975, 1980]。

こうした時代的認識に立つとき、これからの人類学の課題として考慮しなければならい重要な視点がいくつか浮かび上がってくる。その一つは、グローバリゼーションがもたらすものとしての文化概念の再検討の必要である。ヒトの動きの激しい現代のコミュニティを「文化集団」(文化保持単位)と見なすことは次第に困難になってきている。文化保持者が一定の空間(テリトリー)としてのコミュニティに定住するとは限らないからである。文化保持者(の居住空間)の脱テリトリー化、トランスナショナル化の事実を踏まえれば、「明確な境界を持つ文化」(bounded culture) 概念は著しく困難である。半面、それぞれのフィールドにおいて、仮に「明確な境界」が保持されているように見える場合も、その独自性を明らかにするとともに、その保持のメカニズムについては、トランスナショナリズムの要因の介入・媒介の可能性を視野のうちに入れることが求められよう。第二は、グローバル化時代の現代人類学では、コミュニティそのものの研究とともに、そのコミュニティが関与するネットワークの構造と過程の解明が重要な課題になることである。そのことは、第三の視点として、文明の中心と周縁といった二分法的思考は妥当性を失ったことを認識し、むしろヒト・情報・文化の双方向的流入・環流の過程とそこから発展する新しい公共文化・大衆文化の可能性に着目することが肝要である。最後に、「トランスナショナル・ミグラント」とか「ゲスト・ワーカー」とか呼ばれる出稼ぎ外国人労働者の増加だけでなく、戦争、失業、貧困を原因とする民衆の離散・分散が既存のコミュニティのトランスナショナル性強化に貢献する要因となっていることに注目する必要がある。世界の「根無し草」は1億人にのぼるとの報告もあるが、その真偽はともかくとして、文化的ルーツを失った人々が増加していることは否定できない事実である。そうした事態において、いったい人々の文化的アイデンティティというのはどのようなものであろうか。例えば、ジェンダー、人種、エスニシティ、国家のいずれに関しても、単純ではない。同性愛者、混血児、二重民族意識、ホスト国への帰属意識と祖国への帰属意識の二重性など、アイデンティティの二重性・多重性を理解する視点が文化研究においては不可欠である。そしてそれらの視点は、グローバル化時代の「人権」とは何かを改めて

検討する課題を人類学に突きつけている。

【引用文献】

Adler, Peter S., 1975. "The Transitional Experience: An Alternative View of Culture Shock." *Journal of Humanistic Psychology,* 15(4), pp. 12-23.

Adler, Peter S., 1985. "Beyond Cultural Identity: Reflections on Cultural and Multicultural Man," in Samovar, L. & R. Porty (eds.), *Intercultural Communication: A Reader*, 4th Edition, Belmont, CA: Wadsworth Publishing Co., pp. 410-427.

Appadurai, A., 1990. "Disjuncture and Difference in the Global Cultural Economy," in Featherstone, Mike (ed.), 1990, *Global Culture: Nationalism, Globalization and Modernity,* London: SAGE, 295-310.

Appadurai, A., 1991. "Global Ethnoscapes: Notes and Queries for a Transnational Anthropology." In Fox, R.G. (ed.), *Recapturing Anthropology*, Santa Fe, NM: School Am. Res. Press, pp. 191-210.

Basch, L., Glick, Schiller N. and Szanton-Blanc, C. 1994. *Nations Unbound: Transnational Projects, Postcolonial Predicaments, and Deterritorialized Nation-States.* Langhorne, PA: Gordon & Breach.

Befu, Harumi, 1983. "Internationalization of Japan and Nihon Bunkaron," in Mannari and Befu, eds., *The Challenge of Japan's Internationalization,* Kwansei Gakuin University and Kodansha International Ltd. pp. 232-266.

Conkright, Thomas D., 1975. "The Problem of Bicultural Learning," *Anthropology and Education Quarterly,* VI-4 (November 1975), pp. 12-19.

Crick, Malcolm 1989. "Representations of International Tourism in the Social Sciences: Sun, Sex, Sights, Savings, and Servility." *Annual Review of Anthropology*, 18, pp. 307-44.

DeBendictis, D.J. 1992. "Judges Debate Cultural Defense: Should Crimes Acceptable in an Immigrants' Homeland be Punished?," *American Bar Association Journal,* 78, pp. 28-29.

Foster, Robert J., 1991. "Making National Cultures in the Global Ecumene," *Annual Review of Anthropology*, 20, pp. 235-60.

Gonzales, N.L. 1992. *Dollar, Dove and Eagle: One Hundred Years of Palestinian Migration to Honduras.* Ann Arbor: University of Michigan Press.

Glick, Schiller N., Basch, L. and Blanc-Szanton, C., (eds.) 1992. *Towards a Transnational Perspectives on Migration: Race, Class, Ethnicity, and the Nationalism Reconsidered.* New York, NY: Academic Science.

Gutierrez, Fernando Jose, 1985. "Bicultural Personality Development: A Process Model," in Garcia, Eugene E. and Padilla, Raymond V. (eds.), *Advances in Bilingual Education Research,* Tucson, Ariz.: The University of Arizona Press, 1985. pp. 96-124.

Harvey, D. 1989. *The Conditions of Postmodernity: An Inquiry into the Origins of Culture Change*. Cambridge: Blackwell.

Inda, Javier 1996. " Transnationalism", in Levinson, David and Ember, Melvin (eds.), *Encyclopedia of Cultural Anthropology*. New York: Henry, Holt and Company, pp. 1327-1329.

Kearney, M. 1986. "From the Invisible Hand to Visible Feet: Anthropological Studies of Migration and Development," *Annual Review of Anthropology,* 15, pp. 331-61.

Kearney, M., 1989. *Anthropological Perspectives on Transnational Communities in Rural California*. Davis, CA: Inst. Rural Studies.

Kearney, M. 1995a. "The Local and the Global: The Anthropology of Globalizaton and Transnationalism," *Annual Review of Anthropology*, 24, pp. 547-65.

Kearney, M., 1995b. "The Effects of Transnational Culture and Migration on Mixtec Identity in Oaxacalifornia," in Smith, M.P., Feagin, J.R. (eds.), 1995. *The Bubbling Caldron: The New Political Sociology of Race and Ethnicity in America*. Minneapolis: University of Minnesota Press.

Kearney, M., 1996. *Reconceptualizing the Peasantry: Anthropology in Global Perspective*. Boulder, CO: Westview.

Lamphere, L. 1987. *From Working Daughters to Working Mothers: Immigrant Women in a New England Industrial community*. Ithaca, NY: Cornel University Press.

Lamphere, L. (ed.) 1992. *Structuring Diversity: Ethnographic Perspectives on the New Immigration*. Chicago: University of Chicago Press.

Lamphere, L., Stepick, A., Grenier, G. (eds.) 1994. *Newcomers in the Workplace: Immigrants and the Restructuring of the U.S. Economy*. Philadelphia: Temple University Press.

Lebra, Takie Sugiyama, 1972, "Acculturation Dilemma: The Function of Japanese Moral Values for Americanization," *Council on Anthropology and Education Newsletter*, 3(1), pp. 6-13.

McFee, Malcolm, 1968. "The 150% Man, a Product of Blackfeet Acculturation," *American Anthropologist,* 70(6), pp. 1096-1107.

Messer, Ellen, 1993. "Anthropology and Human Rights." *Annual Review of Anthropology*, 22, pp. 221-49.

Polgar, Steve, 1960. "Biculturation of Mesquakie Teenage Boys," *American Anthropologist*, 62, pp. 217-235.

Stonequist, Everette V., 1937. *The Marginal Man: A Study in Personality and Culture Conflict*. New York: Russell & Russell.

Useem, John, Ruth H. Useem & J.D. Donoghue, 1963. "Men in the Middle of the Third Culture: Roles of American and Non-Western People in Cross-Cultural Administration," *Human Organization*, 22(3), pp. 169-179.

Wallerstein, I. 1975b. *The Modern World System: Capitalist Agriculture and the Origins of the European World Economy in the Sixteenth Century*. New York: Academic Press.

Wallerstein, I. 1980. *The Modern World System II: Merecantilism and the Consolidation of the European World Economy*. New York: Academic Press.

江淵一公、1990「国際化思想の比較分析」澤田昭夫・門脇厚司編『日本人の国際化』日本経済新聞社、48～74頁。

江淵一公、1994、『異文化間教育学序説－移民・在留民の比較教育民族誌的分析－』九州大学出版会。

江淵一公、1997a、『大学国際化の研究』、玉川大学出版部。

江淵一公編、1997b、『異文化間教育研究入門』、玉川大学出版部。

江淵一公・山ノ内裕子、1996「日系外国人児童の受け入れと教育に関する事例研究－受入中規模校の調査から－」『外国人子女教育に関する総合的比較研究』（研究代表者・江淵一公）平成６・７年度科研報告書［総合研究Ａ］、185～202頁。

（1996/6/29九人研総会講演）